

## 中1国語①

次の文章を読んで、あとの間に答へなさい。

(山猫から裁判の手伝いを頼まれた一郎は、山を訪れた。)

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をさきました。びつくりして屈んで見ますと、草のなかに、あつちにもこつちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのでした。よくみると、みんなそれは赤いズボンをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあわあ、みんなにか言つてているのです。

「あ、来たな。蟻のようによつてくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そこのとこの草を刈れ。」山猫は巻たばこを投げすてて、大きいそぎ<sup>(注)馬車別当</sup>にいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌<sup>(注)かま</sup>をとりだして、ざつくざつくと、山猫の前のとこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかつて、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

馬車別当が、こんどは鈴<sup>(注)すず</sup>をがらんがらんがらんがらんと振りました。音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこしそうになりました。見ると山猫は、もうつか、黒い長いで縫子の服<sup>(注)しゆす</sup>を着て、もつたらしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭<sup>(注)かわむち</sup>を二三べん、ひゅうぱちつ、ひゅう、ぱちつと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかおりをしたらどう

氏名

月 日

だ。」山猫が、すこし心配そうに、それでもむりに威張つて言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、ダメです、なんといつたって頭のとがつてるのがいちばんえらいんです。そしてわたし<sup>(3)</sup>がいちばんとがつています。」「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたし<sup>(3)</sup>がいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」「そうだよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおつしやつたじやないか。」「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しつこのえらいひとだよ。押しつこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言つて、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつつついたようで、わけがわからなくなりました。そこで山猫が叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。しづまれ、しづまれ。別当がむちをひゅうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとしそうなりました。」

(宮沢賢治「どんぐりと山猫」による。一部表記の変更がある。)

(注) はぜる=割れてはじける。

馬車別当=馬車を操る御者のこと。

縫子=布の織り方の一種。

――線部①「こんどは」は、どの文節を修飾していますか。修飾している文節を一文節で抜き出しなさい。

――線部②「まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだ」とありますが、ここでの表現の工夫として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1 体言止めが用いられている。

2 擬人法が用いられている。

3 直喻が用いられている。

4 倒置法が用いられている。

――線部③「わたし가いちばんとがっています」を文節に分けると、いくつの文節からなっていますか。文節の数を漢数字で書きなさい。

――四  
で囲んだ部分は、どんぐりたちがどんなことを主張し合っている様子を表現していますか。説明しなさい。

五 この文章を読んだ三上さんは、次のように思いました。

この文章には、擬態語や擬音語の使い方に特徴があるね。表現を強調する目的でそういうんだろうな。



三上さんが言っている、擬態語や擬音語の使い方の「特徴」とは、どのようなところだと考えられますか。次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。

条件1 文章中の擬態語（または擬音語）を一つ抜き出して、その特徴について説明すること。抜き出した擬態語（または擬音語）は「」で囲むこと。

条件2 二十字以上、四十字以内で書くこと。

条件3 原稿用紙の使い方に従って書くこと。

20
40